

## 妊娠初期における胎児の成長不良が学童期の心臓血管病のリスクに関連

妊娠初期に胎児の成長不良があると学童期の心臓血管系に影響が現れるかについて、オランダの1,184人の児童（年齢の中央値は6歳）を対象に前向きコホート研究を実施した。

児童の肥満度指数（BMI）、体脂肪分布、血圧、血中のコレステロール、トリグリセリド、インスリン、C-ペプチドについて計測し、心臓血管病のリスク群（腹部周辺の脂肪量の高値、高い収縮期または拡張期血圧、HDLコレステロールの低値、トリグリセリドの高値、インスリンの高値、これらのうち3つ以上が該当するもの）との関連について検討した。その結果、妊娠初期の胎児の体長が1標準偏差大きいと、学童期の体脂肪量（-0.30%）、腹部体脂肪量（-0.07%）、拡張期血圧（-0.43mmHg）、総コレステロール（-0.05mmol/L）、LDLコレステロール（-0.04mmol/L）、心臓血管病のリスク群になるリスク（相対危険度0.81）の低下に関連性がみられた。心臓血管病のリスク群でない学童と比べ、心臓血管病リスク群の児童は妊娠初期の体長が小さく、妊娠中期および後期の胎児の体重も軽かったが、6か月以降の体重は重かった。

したがって、妊娠初期の胎児の成長不良は学童の心臓血管病のリスクに関連することが示された。妊娠初期は、健康な心臓血管のために重要な期間であることが示唆された。

出典：British Medical Journal. 2014; 348: g14